

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 24 日現在

機関番号：12401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885012

研究課題名(和文) 帝国崩壊期のロシア系ユダヤ人における相互依存的アイデンティティ

研究課題名(英文) The interdependent identity of Russian Jews after the Imperial collapse

研究代表者

鶴見 太郎 (TSURUMI, Taro)

埼玉大学・研究企画推進室・准教授

研究者番号：00735623

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：ロシア帝国の崩壊がロシア・ユダヤ人に与えた影響のなかで、本研究は、彼らのユダヤ人としてのあり方への影響を探った。特に、自由主義系のユダヤ人に着目し、シオニストと自由主義者の議論を読み解いた。帝国崩壊は、彼らのユダヤ人としてのあり方にロシアという場が重要であったことを浮き彫りにした。すなわち、西欧化の推進者としての役割や、経済的機能などの点で、「後進的」ロシアだからこそユダヤ人が活躍する余地があると考え、それゆえに彼らはロシアという場を重視していたのである。自由主義者はあくまでもロシアの再考を追求したが、シオニストの多くは、ロシアを失ったことで孤立化の道を歩んでいくことになった。

研究成果の概要(英文)：This project examined how the collapse of the Russian Empire affected the identity of Russian Jews. I focused on liberal wing of Russian Jews, including Zionists and Liberals. The analysis of their arguments revealed that the collapse of the Empire made them conscious of the importance of Russia as their foundation. They considered that Jews could be most required in "backward" Russia with their roles as Westernizers and entrepreneurs. Russian Jewish Liberals continued to dream of the resurgence of Russia, whereas Russian Zionists began to be detached from Russia, isolating themselves as a Jew.

研究分野：歴史社会学

キーワード：ユダヤ人 ロシア シオニズム 自由主義 帝国

1. 研究開始当初の背景

私はこれまでに、主著『ロシア・シオニズムの想像力 ユダヤ人・帝国・パレスチナ』（東大出版会、2012、日本社会学会奨励賞受賞）に代表されるように、ロシア系ユダヤ人のシオニズムを素材に、ナショナリズムと帝国の関係性について研究を行ってきた。そのなかで、自己完結的なユダヤ・アイデンティティを終始目指したように見えるシオニズム運動においても、その初期においてはロシア帝国の存在が大きかったことを明らかにした。一言でいえば、シオニストは、ロシア帝国内でいかにユダヤ人の地位を向上させるかという問題意識のもとで、ユダヤ人の尊厳を引き上げるためにパレスチナでの民族的拠点設置を目指していたのである。

第1次世界大戦後に諸帝国は崩壊したが、シオニストの一部は西欧に残った。そして、そこには帝國的なロシアの復興に尽力するシオニストも含まれていた。申請者がその後エルサレムやニューヨークでの学振 PD・海外特別研究員時代に進めた研究成果の一部である拙稿「ダニエル・パスマニク 白系ロシアのシオニスト、あるいは二重ナショナリスト」『思想』2013.10で明らかにしたように、その人物が体現していたのは、ロシアとユダヤの運命を不可分とみなす二重ナショナリズムである。申請者は、この人物がパリで一時期関わっていた『エヴレイスカヤ・トリビューナ』（ユダヤ報知）という自由主義系ロシア・ユダヤ人がロシア語で刊行していた週刊紙の初年度の諸号をレビューするなかで、こうした二重ナショナリズムが、彼ら自由主義系ロシア・ユダヤ人のあいだでより一層顕著であったことを発見した。彼らの二重ナショナリズムは、ユダヤ・アイデンティティと居住国民としてのアイデンティティを融合させるものである。それは、ユダヤ教を個人の信仰の問題に押しとどめ、居住国民としてふるまう西欧ユダヤ人的なあり方とは異なり、ユダヤ人がロシア帝国を構成する民族として、ロシアにおいて固有の役割を持つとする捉え方である。実のところ、非ユダヤ系ロシア人の側でも、ロシアを多民族国家として積極的に位置づける発想は少なからず存在していた。つまり、ロシア帝国においては、マイノリティもマジョリティも、それぞれのアイデンティティが相互に依存的だった場合が少なからず見られたのである。

このように、アイデンティティの源泉のすべてを自らのうちに求めず、他者に一部依拠するあり方は、これまでユダヤ史研究においてさえほとんど注目されてこなかったものであり、すべてを自己完結させようとする傾向にある国民国家体系におけるアイデンティティのあり方を歴史的・社会的に位置づけるうえでも、さらに本格的に検証していく価値を持つ。

2. 研究の目的

本研究は、20世紀前半のロシア系ユダヤ人を事例に、マイノリティにおける集合的アイデンティティと国家的なアイデンティティの相互依存関係を社会的な観点から明らかにする。多民族国家におけるマイノリティが、自民族と国家に二重に帰属意識を持つことはこれまでも頻りに論じられてきたが、双方のアイデンティティがいかなる関係にあるのかは十分に検証されてこなかった。本研究では、帝国崩壊期に国家的基盤を失った自由主義系ユダヤ・ナショナリストが、亡命先のパリで出版していたロシア語週刊紙の分析を中心に据え、アイデンティティという次元で、帝国とマイノリティの関係性を検証する。自己完結的なアイデンティティを強めていったシオニストとも比較しながら、帝国崩壊がマイノリティに与えた影響に関する新たな知見を提出する。

3. 研究の方法

ロシア語定期刊行物を歴史社会的に読み解くことが研究の中心となる。まずユダヤ史に関わる部分については、すでに収集を終えている『エヴレイスカヤ・トリビューナ』の体系的分析に着手する。また、ロシア史の比重が高い問題については、『ポスレドニエ・ノヴォスチ』の収集・整理をアメリカやロシアで進め、分析していく。その際、両者を取り結ぶヴィナヴェルに特に注目し、米露仏イスラエルで彼に関する史料調査を行うとともに、現在彼の伝記を執筆しているサンクト・ペテルブルク大学のV・ケルネル氏などの連携をはかる。最後に、同様の地場から生まれながら、最終的に単一的なアイデンティティを明示していったシオニストの諸議論を読み込んでいき、ヴィナヴェル周辺との相違点を析出することで、本研究のまとめとし、シンポジウムでの議論を経て論文として完成させる。

4. 研究成果

ロシア・ユダヤ自由主義者とシオニストの帝国崩壊前後の諸議論を精査・比較していくなかで、以下のことが明らかとなった。

20世紀初頭前後のロシア帝国では、ポーランド人やウクライナ人のあいだでも次第にナショナリズムの機運が高まりつつあった。議事をロシアに導入する契機となった1905年革命では、ロシアが多様な民族に同権を与える国家に生まれ変わることが期待された。私自身が2012年の著書『ロシア・シオニズムの想像力』のなかで明らかにしたように、単にパレスチナに逃れることよりも、ロシアにおけるユダヤ人の民族的権利の承認を求めていたシオニスト運動も、こうした文脈のなかで盛り上がりを見せた。

このことからわかるように、この段階でのシオニズムは、ユダヤ人が安住することだけに視野を絞っていたわけではなかった。それ

が最終的な目的であれ、そのためには帝国全体の民主化が不可欠であると理解し、他の民族との共闘を視野に入れていた。本稿ではディアスポラに長くとどまったシオニストに焦点を当てているが、このことは、早々にパレスチナ開拓に向かったシオニストにも当てはまる。彼らもまた、社会主義的な理想に燃え、「搾取者」としてのユダヤ人の生き方を根本的に変えるために農民化することを目指していた。その一つの帰結が、一時期世界的に注目されたこともあるキブツである。アラブ人との労働組合の展開も模索された。

つまり、20世紀初頭までの段階では、シオニストは、ユダヤ人の境界を超えて他者とながら、いわば普遍的な原理についての関心を保っていたのである。もちろん、普遍主義は普遍主義で限界を持つ(その典型が帝国主義・植民地主義である)。だがここで重要であるのは、この段階でのシオニズムが、軍事という殻に自らを閉じ込めようと決め込んでいたわけではまだなかった、ということである。基本的にはロシア帝国という枠に限られるとはいえ、シオニストは他者とのつながりを具体的に思い描き続けていたのだ。

では、現在ではシオニズムの大きな特質とさえいえる軍事信仰の契機とは何だったのか。それは、ユダヤ人に対してさらに強烈に吹き荒れていった物理的暴力であったと筆者は考えている。そしてそれは、暴力を振るわれたから暴力で返すという単なる脊髄反射にとどまらない、より深刻な問題にかかわっている。

1903年から1906年にかけて、より大規模なポグロムがユダヤ人を襲う。このとき、シオニストや他のユダヤ人の運動のなかから、自衛組織が立ち上がった。先述のように、これはユダヤ史のなかでの新しい動きである。ユダヤ人がユダヤ人自身のための軍事組織を立ち上げた例は、長いユダヤ史のなかでも、パレスチナの地にユダヤ王国が存在していた20世紀前まで遡らなければならない。

そしてロシア帝国は、1917年に崩壊する。それは多くのユダヤ人にとってさらなる苦境の始まりだった。赤軍(ボリシェヴィキ)と白軍(自由主義者と右翼を中心とした反ボリシェヴィキ)の争いに、ウクライナではウクライナ・ナショナリストも参入する内戦が数年にわたって繰り広げられたが、その際、ユダヤ人に対する暴力がかつてない規模で吹き荒れたのである。

反ユダヤ主義をブルジョワのプロパガンダとして抑制しようとした赤軍に対し、白軍はボリシェヴィキの親玉としてユダヤ人を敵視した(これはもちろん偏見であり、この時点でユダヤ人はせいぜい人口比と同程度しかボリシェヴィキには所属せず、社会主義政党ではメンシェヴィキにより多くのユダヤ人がいた)。ウクライナ・ナショナリストはユダヤ人を、ウクライナ独立を阻む裏切り者として攻撃した。

こうしたなかで、ユダヤ人の多くが、もっとも「まし」であったボリシェヴィキに次第に傾いていったのも無理はない。だが、中産階級を敵視するボリシェヴィキを危険視したユダヤ人も少なからずおり、彼らのなかには、ポグロムにもかかわらず白軍を支援する者がいた。彼らはロシアの国家的秩序が回復すれば、ポグロムのような粗野な行為は制止されると見ていた。

だが、思想的には赤軍よりも白軍に近い者も多かったシオニストのあいだで、ユダヤ人に対する暴力をより深刻に捉える者は確実に増えていた。それは自衛組織の拡大という実際の側面にとどまらず、ロシアに対する不信感としても表出した。ロシアにおいて、他者との具体的な関係性のなかで自己の存在意義を見出していたユダヤ人の一部は、ここに至って、他者とのつながりを捨て、孤立化の道を進むことになったのである。

孤立化の道を進むことを選択したもこそがシオニストであり、帝政期と同様の姿勢を保ち続けたのが、亡命後も白系ロシア人のあいだで活動を続けた自由主義者であった。自由主義者は、ロシアにとってユダヤ人の特質・西欧化の推進者や経済的ネットワークなどがいかに重要であるかを説き、ロシア人のなかでユダヤ人の特別な位置を議論する論者に言及した。ポグロムはあくまでも強力な国家機構の不在ゆえの無秩序に起因すると彼らは考えた。だが、シオニストは、ポグロムを、ロシア人に本質的なものとしてより深刻にとらえ、そのことがロシアに対する不信感につながっていった。彼らはアイデンティティのよりどころとしてロシアに依拠することをやめ、だからといってほかに依拠する先を求めめるのではなく、ユダヤ人として自己完結する道を選んでいった。

こうした他者に対する姿勢の変化こそが、シオニストが軍事に身を包むための前提条件だったのではないかと仮説がここで新たに登場する。軍事とは、究極的には敵と味方を明確に分け、その「間」を決して許さない論理を前提とする。そのため、他者とのつながりの断絶は、軍事化への障害がなくなったことを意味する。そしてこうした傾向は、ロシア帝国亡き後のポーランドにおいて増幅していく。

今後の研究では、さらにこうした側面について、ヘブライ語誌などを交えて検証を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

Taro Tsurumi, "Jewish Liberal, Russian Conservative: Daniel Pasmanik between

Zionism and the Anti-Bolshevik White Movement," *Jewish Social Studies*, 査読あり、21(1), 2015, pp. 151-180.

鶴見太郎「ロシア・シオニズムの亡命」『ユダヤ・イスラエル研究』29、査読なし、2015年、44-53頁。

鶴見太郎「旧ソ連系移民とオスロ体制

イスラエルの変容か、強化か」査読なし、今野泰三・鶴見太郎・武田祥英・白杵陽編『オスロ合意から20年 パレスチナ/イスラエルの変容と課題』人間文化研究機構地域研究推進事業「イスラーム地域研究」東京大学拠点、2015年、127-138頁。

〔学会発表〕(計6件)

Taro Tsurumi, "Jewish Nationalism in the Russian Language," The World Congress of the International Council for Central and East European Studies 2015年8月5日 神田外語大学(千葉県千葉市)

Taro Tsurumi, "Russian Jews after the Imperial Collapse, East and West," at "Russia and Global History" スラブ・ユーラシア研究センター夏期シンポジウム 2015年7月31日 北海道大学(北海道札幌市)

鶴見太郎「ユダヤ人とロシア・ユダヤ人の間 基盤としてのロシア、媒介としてのユダヤ」ワークショップ「間にあるものの現代史 ロシア・中東・東アジアにおける仲介人と境界人」2015年3月10日、埼玉大学東京ステーションカレッジ(東京都千代田区)

Taro Tsurumi, "Between Hyphenated Jews and Independent Jews: The Collapse of Empire and the Courses of Russian Jewish Identity" International Conference "Mediating Israeli History and East European History: Zionism and Jewish Migration from Russia and Poland," Tokyo Station College, Saitama University(東京都千代田区), Jan. 11, 2015.

鶴見太郎「ロシア・シオニズムの亡命 ハルビンにとどまったシオニスト」第64回日本西洋史学会、2014年6月1日、立教大学池袋キャンパス(東京都豊島区)

鶴見太郎「ジャボティンスキーか、プーチンか:「イスラエル我が家」党首リーベルマンと旧ソ連」第30回日本中東学会年次大会、2014年5月11日、東京国際大学第1キャンパス(埼玉県川越

市)

〔図書〕(計1件)

今野泰三・鶴見太郎・武田祥英編『オスロ合意から20年 パレスチナ/イスラエルの変容と課題』(編集・および上記・「おわりに」の執筆) 査読なし、人間文化研究機構地域研究推進事業「イスラーム地域研究」東京大学拠点、2015年、145頁(i~vii、127~138、139~143担当・1つ目と3つ目は今野泰三との共著)。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
取得年月日:
国内外の別:

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鶴見 太郎 (TSURUMI, Taro)
埼玉大学・研究企画推進室・准教授

研究者番号: 00735623

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: